

ごあいさつ



松山市文化協会会長  
今井 琉璃男

新緑が鮮やかな好時節、多数の皆様をお迎えして「第23回二之丸新能」を盛大に開催できますことは、松山市文化協会にとりまして大きな喜びでございます。また、開催に当たり御尽力を賜りました愛媛能楽協会をはじめ関係の皆様方に、心からお礼申し上げます。

さて、江戸時代に武家の式楽として完成された能楽は、松山藩でも二之丸、三之丸と二つの能舞台を有するほどに栄え、その後町方にも広がりました。この二之丸新能も、かつて「東雲さんのお能」として親しまれた、旧藩臣たちによる東雲神社への奉納にその源を発し、能を愛する松山の人々とともにその伝統を継承し、松山の特色ある伝統芸能としてさらに発展させたいとの思いを込めて開催しているところでございます。

この二之丸新能も歴史を重ねる中で、松山の春を彩る行事として定着しておりますことを大変うれしく存じますと同時に、ここまで育てていただいた市民の皆様、また、磨き抜かれた至芸を御披露いただく愛媛能楽協会の皆様をはじめ関係の皆様方に改めて感謝申し上げます。

今宵、皆様方には、かがり火に映える幽玄の世界に浸っていただき、松山の春を満喫していただければ幸いです。

### 第二十三回 二之丸新能

能組

舞囃子(喜多流)

敦 盛 澄田 恭一

大鼓 篠崎 弘行  
小鼓 菅 啓好

笛 西山 美穂子

平成二十六年五月八日午後六時始め  
松山城二之丸史跡庭園内特設舞台

ごあいさつ



松山市長  
野志 克仁

青葉若葉が爽やかに香り、今年も二之丸新能の季節がまいりました。本新能が、多くの市民の皆様親しまれ、23回目を迎えられることも、御出演の愛媛能楽協会の皆様をはじめ、松山市文化協会など関係の皆様方の御尽力のたまものと、深く感謝申し上げます。

さて、松山における能楽は、江戸時代、藩の手厚い保護のもと隆盛を極めました。その後、武家・町方ともに能楽に親しんできた長い歴史の中、明治以降の存亡の危機も乗り越えて現在まで受け継がれており、伝統ある松山の宝と言えます。また、この二之丸を有する松山城も、明治初期にあった廃城の危機を、存続のために尽力した伊佐庭如矢氏の努力と城を愛する人々の熱意で乗り越え、現在も人々に親しまれる松山の大切な宝となっております。

松山市では、こうした「誇れる」地域の宝に更に磨きをかけ、本市の発展につなげようと、「たからみがき」のまちづくりを進めており、現在、これも伊佐庭如矢氏が改築を手掛けた道後温泉本館の改築百二十周年を記念し、温泉とアートを組み合わせる国際芸術祭「道後オアシス2014」を開催しています。こうした歴史ある建造物と芸術文化の組み合わせから生まれる感動は、毎年、本新能でも感じており、今年もこの二之丸で、磨き抜かれた能や狂言を堪能できますことは、本市の文化振興の一助となるものと期待します。

皆様方には、今宵、歴史の記憶を残す石垣を背景に、かがり火に映える幽玄の世界を存分に味わっていただきますとともに、能楽をはじめとした松山の特色ある文化の継承、発展に一層の御支援をお願い申し上げます。

舞囃子(観世流)

巻 絹 関谷 由美子

大鼓 岡本 靖  
小鼓 菅 啓好

太鼓 児玉 眞美  
笛 一宮 教伸

地謡  
土居 英雄  
奥村 武久  
門屋 庸夫  
奥村 敏仁

金子 敬一郎  
金子 匡一  
佐賀 博

狂言(大藏流)

昆布売 大名 古川 道郎

昆布売 岩田 了  
後見 古川 喜朗

地謡

玉井 千恵  
金子 聡哉  
藤波 重彦  
高橋 秀子

(火入れ式)

舞囃子(金剛流)

善知鳥 大川 磨美

大鼓 岡本 靖  
小鼓 丹下 紀香

笛 松下 義恵

能 (宝生流)

前シテ 田中 晴子  
後シテ 結城千恵美

大鼓 中村 豊子  
小鼓 丹下 紀香

地謡

榎垣 孝文  
宇高 通成  
宇高 徳成

藤

坂苗 融

大鼓 中村 豊子  
小鼓 丹下 紀香

乗松 克子  
岡本 知子

地謡

宮内 眞子  
竹内 澄子  
阿部由利子  
石黒 実都  
岡田 康子  
関 直美

附祝言

後見 石黒 孝  
澤田 宏司

終了予定 午後八時半頃